

菱肥会全国ブロック交流研修会 in 愛知

去る10月15日～16日、菱肥会全国ブロック交流研修会が愛知県にて開催された。全国より菱肥会会員、賛助会員など35名の参加があり、「トマト」を切り口に、講演と現地研修会が行われた。

現在、トマトは日本で120種以上が品種登録され（世界では8,000種以上）、全国で広く生産されている。ご存知の通り、トマトは健康食品としても注目を集めており、特にカロテノイドの一種で、自然に存在する赤色の色素である「リコピン」は抗酸化力が強く、血糖値の低下、がん予防、動脈硬化予防、喘息改善、美白効果、ダイエット効果などがあるとされている。東海地区（特に愛知、岐阜、静岡）は全国でも有数のトマト産地だ。愛知県は施設園芸の普及率が日本一で、特に東三河地域（豊橋市・田原市）では、トマトの施設栽培が普及しており、生産量が県全体のほぼ半数を占めている。

研修1日目は、NPO法人日本プロ農業総合支援機構（J-PAO）の竹本事務局長より「J-PAOの農業経営サポート」と題してプロ農業者（専業農家）への事業支援についてご説明があった。続いてカゴメ（株）の藤井執行役員農事業本部長より、企業による農業経営に携わっている立場から「大型施設園芸に託した農業ビジネスの新たなかたち～カゴメ（株）『トマトと野菜カンパニー』への挑戦～」と題し、トマトの新たな需要の創造も含めた徹底した販売戦略、国内でも先んじてオランダ式の「総合的環境制御型栽培法」に着目し、自社農場運営、大型契約栽培にて実践されている現状等についてご講演頂いた。

研修2日目は、豊橋サイエンスコアにて、産学共同でトマト研究を行い、1年間で10a当たりトマト50t採りに成功した太陽光利用型植物工場「IGHプロジェクト（Innovative Green Houseプロジェクト）」の実験農場を視察させて頂いた。（株）サイエンス・クリエイトの山村食農領域コーディネーターより「IGHプロジェクト」の概要ご説明頂き、次に実験農場ではイノチオホールディングス（株）事業開発部の鈴木IGHチームリーダーより、施設内の技術について詳細ご説明があった。

日本での一般的なトマトの平均収量は10a当たり20t。これはトマトのハウス園芸先進国であるオランダ（10a当たり70t以上が一般的となりつつある）の半分以下だ。但し、これは、日本での栽培品種が120種以上と多品種なのに対し、オランダは中玉



豊橋サイエンスコアでの現地研修会の様子

日本での一般的なトマトの平均収量は10a当たり20t。これはトマトのハウス園芸先進国であるオランダ（10a当たり70t以上が一般的となりつつある）の半分以下だ。但し、これは、日本での栽培品種が120種以上と多品種なのに対し、オランダは中玉

（次ページへ続く）

多収品種に特化し、少品種で栽培技術開発している事が大きな要因と言われているとの事。日本では、味・食感等を重視する国産大玉トマトでの反収50 t達成は、国内では同社以外成し得ていない技術。同社としては、2014年に達成した反収50 tを今後安定化し、ランニングコスト低減を迫及する事が課題だそうだ。

研修後、日本三大稲荷にも数えられ、商売繁盛で有名な「豊川稲荷」を参拝。境内の厳かな空気触れ、菱肥会会員の皆様のご繁栄を祈念した。2日に渡り研修尽くめの内容でしたが、活発な質疑応答が行われ、充実した研修となった。

新米価格と作況

～需給バランスの均衡と作況で新米価格は上昇

2015年産新米の価格が徐々に明らかになってきた。2015年産主食用米について36都道府県において過剰作付が解消されたこと、昨年の米価下落により飼料用等への作付転換が進んだこと、2014年産の過剰在庫分の売り先確定と今年の作柄が相まって各産地での提示価格は昨年を上回る水準となっている。農水省の10月16日発表では新米の9月の相対取引価格が全銘柄平均で1俵13,178円(消費税込み)で昨年米と比べると5.6%高くなった。

今年より採用された地域ごとの篩目により作況に精度が増す

今年から採用された、地域毎の篩目に基づいた作況指数が農水省より発表されている。9月15日現在では米どころ東北6県で作況指数は各県で102以上、関東では100、西日本では台風と長雨の影響で軒並み90台となっている。現場ではコメが潤沢にあるような話は聞こえてこない。また関東の茨城・栃木・宮城の一部では台風18号の影響で作況低下の懸念、関東以北でも台風通過後は秋の訪れが早く登熟が悪く思ったほどとれていないとの声も聴かれており、関東ものの品質は全体的に良くないのではとの声も聞かれている。10月15日時点での農水省から発表される作況の状況が待たれるところだ。

事前契約数・概算金も前年比上回る

本格的な早生品種が出始めた頃は当用買いに終始して様子を見ていた米卸も15年産米の確保に奔走しはじめたようだ。主食用米の事前契約も前年より早い契約率となっており、9月の相対取引の契約数量は前年同月比49%も増えている。関東品の品質が思わしくないため福島県中通り産等東北の割安感のある銘柄の人气が集中しているとの話も聞いている。コメの業界紙の調べによるともち米を除いた昨年度比でのJA概算金(仮渡金)は1俵あたり1千円以上高い価格がつけられている銘柄が多く2千円以上高い価格がつけられている銘柄もある。また昨年度に大きく値を下げた県産銘柄がやや価格が戻ってきた格好となっている。

28年度産の生産調整

27年産の作況が確定していないが、米価の安定にはやはり生産調整が必要ということになるだろう。市況の回復には6月末在庫が200万トンを超える水準となる事が望ましく、今後も飼料用米等全国で取り組める生産調整方法が継続的に必要となってくるだろう。来年度の実績と今後のコメ相場の動きに着目していきたいところだ。

来年の菱肥会全国ブロック交流会は西部菱肥会が担当となり、当社大阪支店が会員の皆様にご参加して頂ける内容を企画致します。多数の会員の皆様のご参加をお待ちしておりますので、是非奮ってご参加ください。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>